

Title	西郷隆盛はどのように語らせられてきたか
Author(s)	岡島,昭浩
Citation	語文. 2019, 113, p. 39-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

西郷隆盛はどのように語らせられてきたか

出 島

昭

浩

(二〇一八) 『西郷隆盛はどう語られてきたか』 (新潮文 西郷隆盛が、創作や回想の中でどの ゴチック体のものを抜き出す)。注も吉町の記したママである。 示している(リストの中から、 いことを断りつつ、以下のようなものに鹿児島語が見えることを 鹿児島語があるか否かを示したものである。「西南戦争文学」や - 池田大伍傑作 「西郷と豚姫」 の様な歌舞伎新作 」 を対象にしてな 鹿児島語が見えると見做している

大正期 西郷隆盛伝 出版協会「ごあす」位 下中弥三郎 (芳岳) 元年八月 洋一

内外

大西郷秘史 れ。もう此処で可か事御座んす_ 「ソゲン」「オイドン」「晋殿! 田中邁逸 三年一月 晋殿!! やってくりゃ 武侠世界社

||言行史伝/大西郷全史 西郷秘史/大西郷の心の奥底 四月 洋一 大倉書店 田中邁逸 稍々 附録福沢先生の丁丑公論等 (花浪) 上編 六四年

石川平太 (蘇山)

六年

洋一

肥後方言が活躍する

問題 点

庫)と題する著書があるが、

原口泉

当初からでないとすれば、いつからそうなったのか、という問題 ら昭和一三年まで)を取り上げ、地の文が文語か口語か、 かりほか(二〇一八)などがあるが、方言文献学の観点から吉町 である。それについて参照すべきものには、役割語や方言キャラ で語ることになっているが、 義雄(一九三七)がある。 の観点から金水敏(二〇〇八)・田中ゆかり(二〇一一)・田中ゆ ような言葉で語っていたか、 環として、「西郷南洲を主題とした単行書のみ」 これは、九州の「現代方言文学」についての書誌を作るという 現在であれば、西郷隆盛は当然のように、薩摩弁的な語り口 それが、当初からそうであったのか、 語らせられてきたかという問題があ (明治三二年か 篇中に

昭和期 ○□大西郷全集 □南洲手抄言志録解話 □南洲号 □西郷隆盛 ○□大西郷全集]奄美大島と大西郷 西郷南洲 西郷南洲 西郷南洲]大西郷言行録 西郷南洲 陽堂 三巻 普及版 平凡社 版社 は 式 念大展覧会写真帖 · 一 月 郎 「こぎやん」等の肥後式混入 (完 本格的に近い鹿児島方言を使用 日本及日本人第八十九号 「おい」「申さう」位 一二年四月 木村毅 洋一 薩摩特有書翰文用語が散見す 下中芳岳 伊藤 伊藤痴遊 西尾鱗慶 十一月 江東天風 大西郷全集刊行会 大西郷全集刊行会 痴遊 大日本雄弁会講談社 九年二月 昇直盛 (曙夢) 七年 平凡社 評判講談全集 洋 附 四年四月 四年 四年九月初版 西郷 一五年九月初版 洋 家々譜、 · 月 洋 指園 洋二 一五年一月増 第二卷 第一卷 二年十月 第二巻所収 千倉書房 肥後方言らし 南洲先生年譜 忠誠堂 洋一 「ごわす」「申す」 大正期三冊本の 二年六月 一五年十二月 忠誠堂 洋一 中央出 寓生閣 大西郷記 洋 刊 九三三 一五年 馬場 方言 春 第 少 場面では「土佐弁」的要素がときに与えられるが、全面的に「土 馬はいつから土佐弁キャラになったのか」という問題について、 確立された存在となっているとはいいにくい」としている。 ラ」としての萌芽はみられるものの(中略)「方言キャラ」として 摩弁」の対称詞 として確立させる段階には至っていない」としているし、濱本浩 佐弁」的要素が与えられる段階、つまり龍馬を「土佐弁キャラ」 たと考えているようである。 坂本龍馬と同様に、昭和の半ばをすぎてから「方言キャラ」となっ 「方言キャラ」化が定着したとしているが、西郷隆盛についても、 司馬遼太郎の「竜馬がゆく」(一九六二~一九六六)から、 ることが伺える。 「海援隊」 (一九四二) についても、「「西郷隆盛」 のセリフにも 「薩 田中は、和田勝一「海援隊」(一九三九)に対して、「くだけた 方言ステレオタイプについての田中(二〇一一)では、「坂本龍 これによれば、 □大西郷秘史 □は文語文、 西郷南洲 平凡社 版の改版 年九月初版) 年 「九州日報」連載 「オハン」がちらりと入る程度」で、「「方言キャ 大正の初めごろから、「鹿児島語」が使われ 同工異曲 伊藤仁太郎 ○は口語文 田中萬逸 第二巻 (痴遊) (九年十二月) 九年十月 「おいどん」「見ゆる」位 実録維新十傑 洋一 第三巻 (十年一月完) 叢文閣 第

巻 (九

大正期

てい

操著作集』(ゆまに書房、 ある著述目録にも未掲載)でもあり、長めに引用する。 和一六年六月)に寄せた「戯曲と方言」という文章がある。 さて、 東條操が 『真山青果全集』の月報第七号 (第二巻付 一九九五~一九九七) 未収録 (最終巻に 録 『東条

ある。 とうまいにはうまいが少し前のとは扱ひが違ふ。 殆どまことに神技に近い。ところが『城山落城の日』になる 分の高下によつて言葉を使ひわけてゆく微妙な色相の差別 かなと全く感心してしまつた。方言のむづかしさは相手の身 摩訛は江戸の戯作者の昔から写されてゐた特徴の多い、 味をもつて拝見してゐる。 調べてゐる関係上、今度も全集中の戯曲の方言の扱ひ方を興 村』の著者である事を考へればすぐ分る。私は方言をすこし し易い方言ではあるが、これはまたさても見事に写した事 真山さんが早くから方言に関心を持たれた事は たとへば 『西郷隆盛』 』である。 南 小泉 13

らしい嘘が入用なのである。

氏が尋ねてきて下すつた。以下に記すのは同氏が話した真山 石川区第六天町。 たいのでその由を申上げると、態含第六天 る。これは迂濶に筆はとれないと思つた。この疑ひをはらし があるやうである。 とにかく拝見してゆくと戯曲によつて方言の扱ひ方に違ひ 一言半句も調べに調べ練りに練り上げる真山さんであ 一々の引例は省くがそれがこゝには立派に出来てゐる 現在の文京区小日向・春日 私はハテナと思つた。 あの克明 (引用者注 の御宅からw 真似

全集の読者にもかなりな参考になる事かと思ふ

昭

せ土地ツ子の耳には似非訛りは聞いて腹が立つか、をかしい い場合が多い。 これは初期の御作を見ればよく分る。ところが写実的に方言 かである。戯曲の方言移入はこれでは駄目だ、やはりほんと 方言を真似よう < < と思へば思ふほどその効果は思はしくな を入れた戯曲の放送なり演技なりに接してみると、 先生も昔は方言描写に於てかなりなリアリストであつた、 方言は他所者には理解がむつかしい、そのく 演技者が

とは逆で、 役柄によつて七分、 と同夫人の言葉とではこんなところから手心が違ふ。 翁の如きは当然薩麾訛でなければお客が承知しない、 脇役から端役、仕出しとなると相当に方言を加へてゆく、 次には役柄で違ふ。主人公にはなるべく避けるのが常法で、 の方言など――なら、 衆の熟知してゐる方言-合が違ふのである。第三には方言の種類によつても違 れが場面の空気を作る。尤も何にも例外はある。例へば南洲 で、世話物ならかなりの程度は入れてよく、新劇ともなれば て違ふ。時代物には必要でもなるたけ控へ目にするの 層自由でい、、うまく使へば写実的に使つても差支へない。 戯曲に方言を加へてゆく匙加減は、 あまり大衆に耳なれない方言なら大体それらしく 五分、三分といふやうにそれぐ~ なるべく生粋に近い形で入れる。 例へば京、大阪の方言とか鹿児島 まづ戯: 曲 四の種類 つまり 心によっ が

さんの戯曲中の方言の扱ひ方の要領である。これは恐らく本

手だといふ俳優もある、こんな場合は台本から方言を省く必 は本人にまかせておいても間違ひはないが、時には方言は苦 の人達には器用に上方言葉を使ひこなす人が多い。こんな時 の個人性を考へる必要がある。上方役者なら勿論だが、 ためである。なほ細かく言へば、上演にはそれを演じる俳優 相手にするもので、 てゐる円朝の塩原多助程度のもので差支へない。劇は大衆を 感じる程度に入れる。 方言を入れるのは舞台にある気分を出す 例へば上州の方言などなら世間 が知 新派 0

とこんなものであつた。 まアw氏の談話の要領は (以下略) -聞き損ひもあらうが ザ ッ

要もある。

数見られ、二葉亭四迷訳の 人」を上げればよいだろうし、明治以降は、巡査のクヤクヤが多 は近松の「平家女護島」の「薩摩なまり」、「浮世風呂」や「八笑 薩摩訛は江戸の戯作者の昔から写されてゐた」例としては、 「四人共産団」 (明治三七年) における 古く

が

薩摩弁使用もある。

初演 号掲載で、 口雪蓬などが、「そいが好か」などの台詞を語るものである。 言葉を使う。「城山落城の日」には西郷隆盛本人は登場せず、 城の日」は 寅太郎」「午二郎」、 青果の「西郷隆盛」は、『講談倶楽部』 同上 昭和一五年九月初演(全集第九巻による)で、「 『講談倶楽部』 である。 姪「みつ子」、 「西郷隆盛」では、 昭和三年九月号掲載で、昭和四 甥 「隆準」、 西郷も大久保も鹿児島 昭和一四年一月号~三月 妻の「糸子」、 年二月 城山 子の Ш 0

> る」では勝安房と「四年ぶりでごわせうか」などと、 乞」では山岡鉄太郎と「何んでごわすか」などと、「将軍江戸を去 との会話においても「ごわす」「申す」のような言葉を使って会話 江戸を去る」(昭和九年、 たる「慶喜命乞」(昭和五年初出、 また、ここでは触れられないが、「江戸城総攻」三部の 初演初出)にも、 初演は昭和八年)、 西郷がいて、「慶喜命 終篇 薩摩人以外 中 篇にあ 「将軍

的にはどういうことであったのだろうか。 でなければお客が承知しない」ということである。 合に加えて、昭和一六年の時点での「南洲翁の如きは当然薩麾訛 w氏の発言で注目されるのは、真山作品での薩摩 学弁の使 これは、 わ れ具 をしている (両作品とも全集第七巻による)。

白鳥「坂本龍馬」は、真山青果「坂本龍馬」を評したもの六年一〇月)に『中央公論』の「文芸時評」から転載され 同じく『真山青果全集』月報の、第十号 (第八巻付録、 を評したものである 昭和 た正宗

影が見られる。真山氏の新作の人物には『土佐つぽ』らしい 私は読み乍ら、 に出て来る肥後人や長州人にも、 東北人と中国人との面目が現はれてゐる。徳富蘆花の 方色や西国人らしい情調に乏しいと云つていゝ。 ゐることを感じた。真実に即した立場から云ふと、 『島千鳥』の松島千太と明石の島蔵とには、大まかながらも、 長州人らしいところが、さう現はれてゐないやう 東北人たる作者が、 何処となくその出生地の 西国 [の人と土地を書い 黙阿 西国の地 面 7

に思ふ。

劇として上乗としてい、のである。いので、『坂本竜馬』くらゐに人と時とを書き現はせたら、史いので、『坂本竜馬』くらゐに人と時とを書き現はせたら、史たものは、周到な客観性を具へて現はし得られるものではなしかし、現代の写実劇とは違つて、過去の時代を題材とし

くれん? よし……かへてくれんちやア、己どんが皆、引ず利、であろうか、そこで有村次左衛門の台詞は次のようである。中村吉蔵の作品は「井伊大老の死」(大正九年刊、天祐とある。中村吉蔵の作品は「井伊大老の死」(大正九年刊、天祐

下へ下りろ下りろ」「こゝの座敷は暮六つから己どんが借り切つちよるんだ、皆、

ある。

り下ろしてやる」

| Till | Not American | Till | Til

半次郎が「ごわす」を多用するのとは違っている。
さほど使っておらず(わずかに登場する大久保市助も同様)、中村あるが、西郷は「おはん」「おい」「~どん」の他には、薩摩弁をあるが、西郷は「おはん」「おい」

うであるが、このころまでの状況をもう少し見たい。 このあたりは、薩摩藩士に薩摩弁を使わせる、ということのよ

| 演劇脚本の中の西郷

編(一九七〇)などによって知られる。 西郷隆盛を題材とした演劇は、羽田義朗 (一九二六)、野中敬吾

調であり、脚本で見る限りは、薩摩弁らしき文言は見えない。い、西郷吉之助は四幕目に拝郷七之助の名で登場するが、歌舞伎「濤乗船開化初夢」は、明治初年に横浜で初演されたものだとい

まりをまじへて、かの人はさこそあらんと思はする処妙なり」との合巻によって内容を知ることが出来るのみである。西郷を演じの合巻によって内容を知ることが出来るのみである。西郷を演じたのは市川団十郎であるが、渡辺が引用する、観劇した依田学海たのは市川団十郎であるが、渡辺が引用する、観劇した依田学海にのは、が記すように、一部を除いて脚本が残っておらず、同名九九七)が記すように、一部を除いて脚本が残っておらず、同名九九七)は、渡辺保(一河竹黙阿弥の「西南雲晴朝東風」(明治一一年)は、渡辺保(一

舟と隆盛の会見であり、通常の物言いで進むが、海舟の「お引きの西郷は、しばしば「ごあす」を用いる。第三段の其三が、勝海明治三六年初演の高安月郊「江戸城明渡」(同年刊、博文館)で

道は一でごあす」である。後藤隆基(二〇一六)に、勝海舟を、 受け下さるか」の問いに、「先生 安月郊には 示している一方、杉贋阿弥が「高田(実)の西郷吉之助が薩摩弁 岡出身の川上音二郎が演じたことによる批判が多くあったことを ごあす」と「ごあす」を使う。感情の高ぶりで方言が露出した、と の繰り方」を評価したものがあったことも示している。なお、高 いうことであるようにも見えるが、其三の最後の台詞も「天地の (大正五年、 自刊) 所収) が、ここでは西郷は、 「月照」もある(明治三五年初演、 ―月照上人と死ぬ時より悲しう 一貫して薩摩弁を 『月郊脚本集

福

が中心である。 薩摩弁的要素は「ごはす」のみだが、多くの場面で使われる。 三』)、その続編「城山の月」(同年初演、 三宅雪嶺「邊見十郎太」(大正一四年)では、「ごわす」「おは .本綺堂の「西南戦争聞書」(大正一一年初演、 西郷はそうした言い方はなく「~ぢゃ」 『綺堂脚本集 六』)では、 『綺堂脚本集

改造社)では、勝海舟との会見場面でも、 (宮) 吉田絃二郎「西郷吉之助」(吉田絃二郎 して通常の物言いである 『運命の秋』大正一四年、 西南戦争中でも、 一貫

はん」「ごわす」を使う。 は第三幕で江藤と西郷の会話があるが、 鈴木彦次郎「西南挙兵録」(大正一五年 松居松翁「江藤新平」(『松翁戲 曲集 西郷は、「おいどん」「お 大正一五年、 『新小説』 「に発表)。 春陽(19) で 西

> ものも混じる(薩摩は「どげん」で肥後は「どぎゃん」)。 である。「どぎやお考へでごわす」のような肥後的要素と思われる 郷も含めて全員が、「ごわす」「よか」「俺」などの薩摩弁的 物

ゲンコタ(そんな事は)私の知った事ぢゃゴワハンカラ勝手にシ ど見当たらない。南洲号の戯曲以外では、 書があるが、ここでは、西郷を含めて、薩摩弁的な語りはほとん 児島人であり、明治四二年に『絶島の南洲』(内外出版協会)、 久保も含めて薩摩弁が多く使われる戯曲である。田中鉄軒は、 詞中に用ゆる薩摩地方の方言」という注釈があるなど、 (一一○頁)と語り、岩永三省「挙兵前後の事情と逸話」で、「ソ 月尼」で「私は西郷でごはす、宜く取計らひます、 正一〇年に『国民思想の善導と西郷南洲』(広文堂書店)という著 いる戯曲が二つあり、 「おい」程度だが、もう一つの田中鉄軒「史劇 羽田(一九二六)の載る『日本及日本人』南洲号に載せられて 一つは伊藤忞「西郷吉之助」で、「おはん」 村上素道「南洲翁と蓮 西郷隆盛」は、「台 難有うごはす_ 西郷・

講談などの中の西郷

ヤンセ(なさい)」(一八五頁)と大きな声を出す。

b の混ぜ方などは講談を思わせるものである。 ある伊藤痴遊は講釈師であり、 のを見ているが、 次に、講談の類を検討したい。吉町(一九三九)も田 わゆる講談の類を示していないが、 伊藤痴遊 西郷隆盛 地の文は講談調ではないが、 0) 初刊は明治四三年で 吉町は大正一 吉 町の示す中に 四年の

ある(続編も同年刊、終編は翌年刊)。

場面でも次の如くである。西郷の言葉のみを抜き出す。 と記すが(上述のように、薩摩では「こげん」)、薩摩方言の 実態との差はともかく、西郷に薩摩方言的な語り方をさせている ことが、本稿における注目点である。初編では「隠くしても匿く ことが、本稿における注目点である。初編では「隠くしても匿く ことが、本稿における注目点である。初編では「隠くしても匿く では、薩摩方言的要素が弱いが、続編になってからは、会話の相 手が薩摩人でなくても、同じような言い方をする傾向が強まり、 その七一二頁からの、有名な勝海舟との江戸開城についての会見 その七一二百からの、有名な勝海舟との江戸開城についての会見 その七一二百からの、有名な勝海舟との江戸開城についての会見 をの七一二百からの、有名な勝海舟との江戸開城についての会見

「やア、勝先生でごわしたか」

「今度ア、先生もお困りめし申したか」

なはったら、何ぎやもんごわせう」 「御説の御尤ごわす、ぢやが恭順するなら、相当の所に謹慎し

「そいなら、江戸城は直ぐお渡しにない申すかな」

「軍艦は渡せんとでごわすか」

ごわすな一ぎやンにもならう、先生仰せは明後日の進撃を中止せいとでぎやンにもならう、先生仰せは明後日の進撃を中止せいとで「聞けば、却々むづかしか御議論もごわせう、細か項目は、何

ることに変わりはない。 (第二巻一〇二頁)など、若干異なるが、薩摩言葉を基調としてい『伊藤痴遊全集』(昭和四年、平凡社)では「やア先生ごわしたか」

痴遊の『月照薩摩落:安政疑獄』(新橋堂ほか、

明治四三

は、

ない。 地の文がデスマスの講談調であるが、西郷は、薩摩弁を使ってい

隆盛』厚生堂には、少年期の会話に、伊藤痴遊「西郷隆盛」と同年刊の講談速記本、松林伯知『西郷

見さっしゃれ」
見さっしゃれ」
見さっしゃれ」
見さっしゃれ」

さか考ふるところもごわす」(二〇六頁)と語っている。てごわす。朝鮮使節の件は我等自ら主張せしところにして又いさが弱まるが、岩倉具視には、「イヤ今日の事は平素の場合と異なっが見える。勝海舟との対話には「ござる」を使うなど薩摩的要素

が載る(二七三頁。岩波文庫では下巻二一頁)(昭和六年)に「上野公園梅川亭の一夜」があって、次のような話松林伯知は、松林伯円の弟子であるが、篠田鉱造『明治百話』さか考ふるところもごわす」(二○六頁)と語っている。

東京の巡査に薩摩言葉が多かったことは、森銑三(一九六九)・

ているが、伯円がそれを演じていたらしいことが伺える。飛田良文(一九七五)などでも取り上げられるなど、よく知られ

を示すものは見られない。
席(一六二号、明治二十九年一月)にみえる警官には、薩摩訛ただ、『百花園』に掲載の松林伯円「横浜奇談・米櫃」の第十

の「待つ事出来ん」ぐらいのものである。郷である」のような語り口で、共通語的でないものは、一八五号園」二〇二号(明治三十年九月)の第四十四席に見える「我は西園」二〇二号(明治医伝」では西郷も取り上げられている。『百花

は乏しい

治三一年六月)に、「オイドン」「ごわす」などを使う。例えば、第七席(二一一号、明『百花園」の中では、松林伯知「幕末名士伝」の西郷は「ヨカ」

憤争をなすなんといふ、其のやうな小事に拘泥する、西郷吉うけて、国家百年の大計を為さんとする、我が私しの怨みに、己どんは九州武士で、ヨカ当水戸に来り、藤田先生の教へを

要素を示すためだけに使われているようである。話し相手は、藤ここでの「ヨカ」は、「ヨカ為るけへど」などともあり、薩摩弁的之助ではごはんせん、
† (責争をなすなんといふ、其のやうな小事に拘泥する、西郷吉

治四二年、精華堂)がある。りで話しているものとして、坂本忠一郎『西郷隆盛伝』第三編(明ので話しているものとして、坂本忠一郎『西郷隆盛伝』第三編(%)の西郷が、山岡鉄舟や勝海舟を相手に「おいどん」「ごはす」 混じしているわけではない。

田東湖の「塾の青年輩」であるが、西郷は常にその様な話し方を

己どんが吉之助でごはす […] 山岡氏の言葉御道理でごわす、

(四三頁)

み申すでごはす、(五七頁)どんの最も股肱でごはす、以後御見知り置かれて宜しくお頼イヤ勝先生、この二人は、中村、村田と申し居りまして、己

明治四四年の野華山人『西郷隆盛』立川文庫では、方言的要素(タン)

という具合であるが、が可かで。そいは上野であらうと、余所であらうと……。(翌)が可かで。そいは上野であらうと、余所であらうと……。

な真似をした。 痛いよ、ぽんぽが痛いよ。」児童が腹が痛いッて泣くかのやう痛いよ、ぽんぽが痛いよ。」児童が腹が痛いって泣くかのやう肉洲の大きな体は横にごろりと転がった。そして。「ぽんぽが

フル方言」と注されている。「小作トハ小慧ト云フ義ニテ專ラ少年「ポン~~ガ痛イトハ腹痛スルト云フコトニテ小児等ニ対シテ唱話)が引用する柴山景綱の記録にある逸話である(慾)、ここでは、「柴山景綱君越後口出軍中の事歴 附三話」(明治二九年八月の談という部分がある。これは、『史談会速記録』四八輯の寺師宗徳という部分がある。

四 『大西郷の心の奥底』の影響

り、ここでは永山らが薩摩弁を多用している(西郷は登場しない)。り、ここでは永山らが薩摩が見える程度である。 山崎忠和には 『情の南洲』(明治三四年 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781420)が南洲』(明治三四年 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781420)が南洲』(明治三四年 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781420)があり、これは文語体で書かれていて、西郷の言葉として「もうせんがよか」(三三頁)が見える程度である。 ただし付録として「快り、ここでは永山らが薩摩弁を多用している(西郷は登場しない)。

(1911年) (X. Cito) 「まざい 耳の下、石を入っている。平山蘆江『小説/西南戦争』(大正一五年、至玄社) は、西郷をなどと見える。

先生でも、此の度は、お困りでごあせう。ワハハハ。』(三四三頁)

下中弥三郎『西郷隆盛伝』(明治四五年、内外出版)には、『勝

七年、淡海堂)では、薩摩弁的な要素が強くなる会話もあるが、話が、あまり薩摩弁的な要素は強くない。後の「薩摩兵児」(昭和一含めて多くの人が、「ごわす」などの薩摩弁的な言い方をしている当山盧注『小説/西南單争』(プコー五年、 至玄老)に、 世界を

し相手などにより、共通語的な物言いも見られる。

西郷隆盛を主たる対象としたものではないものについては、

ほ

盛は「差し支へはなか」と語り、弟の従道も「叶ひまつせん」とげておくと、安田直『西郷従道』国光書房、明治三五年で西郷隆とんど見ることが出来ていないが、たまたま目についてものを挙

肥筑的な物言いをする

佐賀・長崎・熊本と宮崎県西臼杵では「マッセン」と「マッショーを取り上げる。自序によれば、伊東祐亨の「先生の深意直話を書きは口語体で」との註文で、「座談の通りに」書いたもので、本書中の西郷隆盛らは、一貫して薩摩弁的な語り口のようである。たた、吉町は「肥後方言が活躍する」と指摘している。どれが肥後だ、吉町は「肥後方言が活躍する」と指摘している。どれが肥後だ、吉町は「肥後方言が活躍する」と指摘している。どれが肥後だ、吉町は「肥後方言が活躍する」と指摘している。とれが肥後だ、吉町は「肥後方言が活躍する」と指摘している。とれが肥後だ、吉町は「肥後方言が活躍する」と指摘している。とれば、福岡・大正六年、白水社)を埋め、「まっ」と「マッショーを取り上げる。自序によれば、伊東祐亨の「大正六年、白水社)を取り上げる。自序によれば、伊東祐亨の「大正六年、白水社)を取り上げる。

の「西郷隆盛・西南戦争関係文献目録」の解題などには、「佐賀県へ帰って早速武村に西郷先生を訪うて」いる。『西郷隆盛全集 六』うに思えるが、四四七頁で「おれも辞職して帰国しよう」と、「国学校党に属して居る」というあたりから、熊本に縁のある人のようが、蘇山という号や、十四頁に「熊本から私学校へ行って、私うが、蘇山という号や、十四頁に「熊本から私学校へ行って、私者である蘇山石井平太は、当人の話す際にも「ごわす」を使著者である蘇山石井平太は、当人の話す際にも「ごわす」を使

「モ(ー)サン・モハン」「モ(ー)ソ(ー)」となるのである。(処々でマッシュー)」となるが、宮崎県の他の部分や鹿児島では、

殊に維新後先生の東北巡視の時は、ちょっと半年ばかりずうっと本書一三頁に「二十三の年から先生の若党然と跟いて居ったが、

士族」とあるが、その出自は未詳である。

い」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。四四頁)、京都の人々も「西郷はんとやらいうい」と言っている。

馬遼太郎『翔ぶが如く』「好転」の中で、韓論の議論の際の三條実美への演説というのがある。例えば、司幸計の後世に与えた、隠れた影響と考えられるものとして、征本書が後世に与えた、隠れた影響と考えられるものとして、征

使う (一四七頁)。

て、きつうえらさうなお名前だすがな」というような上方言葉を

はわからない。その内閣記録なるものが残っている。この資料の真偽のほどと、西郷が、三条実美に対し、じゅんじゅんと説いたという上、西郷が、三条実美に対し、じゅんじゅんと説いたという

として、断片的に引用されるものである。記録の西郷のことばに、薩摩弁がまじっている。

記録が内閣記録として残っているのであって、この記録の発見は、これは黒木弥千代(一九六五:一五八~九頁)に、「この演説の

頁)で「この文書は全くの偽物だと一概に否定できないと思うようのである」として、一部載せられ、毛利敏彦(一九七八:一三六られ、野中敬吾(一九七〇)に、「西郷南洲翁口述筆記・鹿野山人られ、野中敬吾(一九七〇)に、「西郷南洲翁口述筆記・鹿野山人られ、野中敬吾(一九七〇)に、「西郷南洲翁口述筆記・鹿野山人られ、野中敬吾(一九七〇)に、「西郷南洲翁口述筆記・鹿野山人られ、野中敬吾(一九七八)に、「西郷南州第日が北京、「本田郷全伝〉の著者として有名な雑賀博愛氏(福岡県出身の国士〈大西郷全伝〉の著者として有名な雑賀博愛氏(福岡県出身の国士〈大西郷全伝〉の著者として有名な雑賀博愛氏(福岡県出身の国士〈大西郷全伝〉の著者として有名な雑賀博愛氏(福岡県出身の国士〈大西郷全伝〉の表書といる。

皆おはんの双肩に懸って居り申すでごわんす。
小広狭の各国を引き寄せて、天孫のうしはき給ふ所とするも、小広狭の各国を引き寄せて、天孫のうしはき給ふ所とするも、小広狭の各国を引き寄せて、天孫のうしはき給ふ所とするも、と聴いて於て下はれ。今の太政大臣は往昔ものと思われる。この本では、

あるが、これは、『大西郷の心の奥底』(三四二~三頁)から出たうになった」とあるものである。ほかにも載せられているものが

おはんな俺どんよりか十二も年下ぢやけん、俺どんより跡と始まり、

下はれ。生き残りまつしゆうで、只今申した事は、よう覚えちおつて

黒木(一九六五)にみえるものでは、「生き残りまつしゆうで」でしゆうで」のような、上記に示した薩摩的でない言い方が見える。きまつせんと」「出来まつせん」「呑み込みまつせん」「残りまつと終わっている。「出来申さん」「当り申さん」の形もあるが、「置

然性の高いことを示すであろう。 然性の高いことを示すであろう。 然性の高いことを示すであろう。 はなく、「生き残りましょうで」)、「まつせん」は、そのまま現れて同様に「生き残りましょうで」)、「まつせん」は、そのまま現れている。また最後の「下はれ」も熊本的なものである(吉町(一九いる。また最後の「下はれ」も熊本的なものである(吉町(一九はなく、「生き残りませうで」になっているが(『翔ぶが如く』も

五 おわりに

見える。要素が見られ、大正時代のうちには、だいぶ定着していたように摩弁的要素が目につき、明治末年の伊藤痴遊ではかなり薩摩弁的治三五年の高安月郊「江戸城明渡」あたりから、「ごわす」など薩以上、おおむね、大正時代ぐらいまでの作品を眺めてきた。明

出来そうである。

出来そうである。

出来そうである。

出来そうである。

出来そうである。

出来そうである。

弁的で、大久保が共通語的である、というような意識は、この頃が吉村和真(二○○二)を引用して指摘するような、西郷が薩摩のがいつ頃であるのかは、検討できていないし、金水(二○○八)薩摩人の中で、西郷隆盛が卓立した「薩摩人キャラ」になった

には見当たらなかった。

識が不足しており、問題点もあろう。ご教示を仰ぎたい。ついても講談関係についても、また鹿児島県方言についても、知さまざまな点に於いて見落としがあるであろうし、演劇関係に

注

- (1) この後、坪内逍遙の「どうせ鎌倉時代の話だし、何ちよつと訛らしく聞えればそれで結構です。方言そのま、では芝居になりません」という談話を紹介し、「名匠の用意には全く符節をあはせるもの が ある」 と も 書 い て い る。https://w.atwiki.jp/kotozora/pages/104.html 参照。なお、このw氏の談話は、田中ほか(二〇一八)などに見られる、テレビドラマと方言との関係を思い起こさせる。演劇における方言については、田中千禾夫(一九七七-一九七八)にも詳しい。
- 「声こそは薩摩なまり世にむつましい [色] むつ言。[詞] うらが「声こそは薩摩なまり世にむつましい [色] むつ言。
- 江戸弁が移りかねる」と十七歳の時に西郷から江戸探索を命じられ江戸弁」を使い(薩摩藩士に対しても)、それは「二十歳越してはこの三部作において、「薩摩藩浪人」の益満休之助が「流暢なる

- と問われ、「(わざと国訛りを出して) はい、然いでごわんす」と答 識は興味深いが、稿を改めたい。 える薩摩藩士を登場させるなど、真山青果の方言使用についての意 たからだと勝安房に語らせたり、「あんた達は、薩摩の御藩中だの_
- からくり』文春文庫での引用で知り、典拠を確認した)が、また別 るといふ噂ぢゃった」という話もある(松原致遠編『大久保利通』 弁は使はれぬさうで『さうでござります』といふ江戸言葉を言はれ (明治四五、 話である。 現実の西郷については、「西郷どんは世間を知っちょる、 新潮社)一六~七頁。綱淵謙錠(一九九二)『人生覗き 鹿児島
- 5 り上げている。西郷隆盛は登場しない。 昭和三年初演。全集第八巻所収。田中ゆかり(二〇一一)でも取
- 6 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/962957/110
- $\widehat{7}$ 『現代戯曲選集』九(大正十五年、 春陽堂)による。
- 8 上方の言葉を流入したから、と言われることがあるが、ここでは措 わす」が薩摩で使われるようになったのは、島津重豪の開化政策で わんす」)など、明治三十年代には、それらしき状況が見える。「ご 月郊「江戸城明渡」(「ごあす」)や二葉亭四迷「四人共産団」(「ご れるようになるのは、 岩田美穂(二〇一四)では、「「ごわす」=〈九州弁〉 昭和初期からである」とするが、 後掲の高安 の例が見ら
- 9 書館にある。http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2607206 『日本戯曲全集4維新狂言集』 昭和七年、 春陽堂。 台帳が国会図
- 10 易」「苛政に屡々市民を苦しめ」などが見える。このセリフ」と見えるが、七之助の台詞にも「諸所の港に通信交このセリフ」と見えるが、七之助の台詞にも「諸所の港に通信交流を改進者を表している。
- 11 http://school.nijl.ac.jp/kindai/NIJL/NIJL-00790.html

岩波書店刊『学海日録』第四巻一〇四頁。

12

- 13 台本と思われるものと清書台本があるという。 後藤隆基(二〇一六)によれば、早稲田大学演劇博物館に、
- 15 お、日置貴之(二〇一九)の、本作と真山青果「江戸城総攻」とを 比較した所は、両作の台詞のありようを考える際にも参考となる。 の観客が、それほど台詞を聞いていなかったことを示している。な 後藤(二〇一六)は、この作品に台詞の重視を見ており、 その 頃
- http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/954303
- 17 16 大正一五年の『我観』新年号にのる戯曲「大久保と西郷」は未見。 現代日本文学全集5三宅雪嶺集』昭和六年、 改造社による
- 18 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1016823/4
- 19 20 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1020667/130 『日本戯曲全集50』昭和四年、 春陽堂による。
- $\widehat{21}$ http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/78142
- 22 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/968827 少し前の六七八頁、初対面の幕臣山岡鉄太郎との会話でも「己ど
- $\widehat{24}$ んは、西郷でごわすよ」などと言っている。 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/889923)(『僧月照 「編」 明治四四年、 東亜堂書房 (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/ 西郷

南

25 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/890161

pid/781342) も同版

- 26 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/890165
- 27 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/890162
- のである。 「ぎゃる」は、近松「平家女護島」の「薩摩なまり」に見えるも
- 29 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781427/86
- 30 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781427/94
- 九年 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781533) 岡島(予定)参照。なお、山崎忠和には『柴山景綱事歴』 の著がある。 (明治

- 32 『や、此は便利だ』でも知られる、平凡社の創業者である。
- 33 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781408
- 34 言を写すなどしている。 五年)などが知られるが、「熊本籠城」(昭和一七年)では、 平山蘆江は出身地である長崎の方言を写した「唐人船」(大正一 熊本方
- 35 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781428/14
- 36 庫本で二冊目 年刊。文春文庫は一九八○年刊。「好転」は、単行本で一冊目、文 初出は、一九七二~六年の毎日新聞。文藝春秋から一九七五~六
- 37 奇なる薩摩方言を雑へたる口語体の文書の如き[…]、それである_ はないが、西郷には尤も多い。西郷が征韓論破裂の際に、三條太政 れは有名なる人物には往々あることで、西郷一人に限りたることで 刊行会)では、「西郷には幾許の仮托の談話・詩文などが多い。こ 大臣に切言したる意見として内閣に保存せられつつありと云ふ怪 徳富蘇峰(一九六二)『近世日本国民史』九六(近世日本国民史

参考文献

と否定している。

岡島昭浩 岩田美穂 よる日本語史研究―近代編―』ひつじ書房 (予定) 「近代語資料としての『史談会速記録』」 『コーパスに (二〇一四) 「ごわす」 金水敏編著 『役割語小辞典』 研究社

(二○○八)「あとがき」 (伊藤公雄編『マンガの中の他者』 臨

黒木弥千代(一九六五)『大西郷の遺訓と精神』南洲翁遺訓刊行会 田中千禾夫(一九七七-一九七八) 『劇的文体論序説』 上下 に、下卷一二十一 この《粋》なるもの 白水社 特

田 中ゆかり (二〇一一) 語まで』岩波書店 『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬

> [中ゆかりほか(二○一八)『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる!』 西郷隆盛観

の変遷

?中敬吾編(一九七○)『西郷隆盛関係文献目録稿 ―』著者自刊(松山市)(続編等もあり

野

 \mathbb{H}

羽田義朗(一九二六)「民衆映画としての南洲映画提唱 (『日本及日本

人』八九号、大正一五年一月、「南洲号」と称す

日置貴之(二〇一九)「明治維新劇の系譜における青果」飯倉洋 編『真山青果とは何者か?』文学通信 <u>ー</u> か

飛田良文 (一九七五) 「現代日本語の形成」 『新日本語講座4日本語 良文『東京語成立史の研究』(東京堂出版、一九九二)の第二部第 歴史』汐文社。特にその第三節「地方語の混入と同化」、後に飛田

森銑三(一九六九)『明治東京逸聞史』平凡社東洋文庫 毛利敏彦(一九七八)『明治六年政変の研究』有斐閣

四章

吉町義雄(一九三九)「西郷南州方言文献年譜」(『九州のコトハ』双文 社出版、一九七六所収)もと、『日本文学』(鹿児島)新規 第二巻 昭和一四年二月

吉町義雄(一九五一)「九州方言敬譲・希求助動詞活用分布相」『文学研

渡辺保(一九九七)『黙阿弥の明治維新』 吉村和真 (二〇〇二) 「新春鼎談 聞』二〇〇二年一月一日 この愛すべき異彩の面々」 新潮社 二〇〇一年に岩波現 『西日本新

edu/35701866/ 中央の鹿児島 .docx)の一部を発展させ、関西大学東西 本稿は、二〇一六年の研究集会「バリエーションの中の日本語史」で発 表した「近代中央語における鹿児島方言」(https://www.academia

学術研究所第二三回研究例会(言語接触研究班)(二〇一八年二月一〇

られてきたか」を発展させたものである。 日)で発表した「近代方言意識史を目指して――西郷隆盛はどう語らせ

『百花園』は日外アソシエーツのDVD-ROM(二〇一四)による。引用に際して、字体は通行のものに改め、振り仮名は適宜省略した。

(おかじま・あきひろ 本学教授)

52